



突撃!

リスクマネージャー!

医療の安全に取り組む全国のリスクマネージャー様にインタビュー

No.39 一宮西病院 医療安全管理室 副室長 医療安全管理者 葛谷俊郎 様

■病院概要

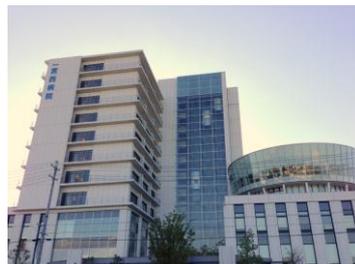
平成 13 年、開院。

平成 21 年 11 月、現在地に新築・移転。

平成 13 年の開院以来、診療科の充実と救急医療への取り組みを通じ、地域の救急・急性期医療を担う病院として、一宮市および尾張西部地区の救急医療拠点としての役割を果たしています。

当病院は、ICU10 床、オペ室が全 8 室、各フロアに食堂およびデイルーム、開放感があるリハビリテーションセンターや屋上庭園を備えた 11 階建ての快適で余裕ある構造になっています。

病床数 400 床(一般)



【病院外観】



【葛谷様】

1. 組織体制について

—医療安全のための組織体制についてお聞かせ下さい。

当院の医療安全体制は、病院長の直下に医療安全管理室を設置しています。

医療安全管理室は、下部組織として医療安全管理委員会を組織しています。

医療安全管理室は、室長、医療安全管理者(葛谷様)、非常勤スタッフの 3 名体制ですが、常駐の専従者は医療安全管理者のみです。

—医療安全管理者(葛谷様)の主な業務内容をお聞かせ下さい。

私の主要業務は下記の通りです。

- ・リスク発生の際、現場を訪問し、対策及び指導を行う
- ・リスク発生の報告を受け、対応する
- ・病棟責任者、病棟リスクマネージャーの教育
- ・必要な看護用品などの調査と購入検討

2. 転倒・転落事例情報の収集と対策について

—事例情報の収集から防止策の実施までの仕組みをお聞かせ下さい。

情報収集は、毎朝、各病棟の管理師長より前日の事例発生の報告を受けます。

以前は、不定期にまとめて報告を受けていましたが、タイムリーに情報が入らず対応が遅れる事を考慮し、今年9月からは事例発生後、速やかに報告をするよう、是正しました。

防止策につきましては、入院時アセスメントスコアシートにより危険度のアセスメントを行い、スコアが10点以上の患者様には、身体抑制またはフローチャートに沿った対応策の実施を検討します。

10点以下の患者様には、部署でのショートカンファレンスを行い、離床センサー、赤外線センサー、衝撃緩和マットなどによる対策を検討し、実施しています。

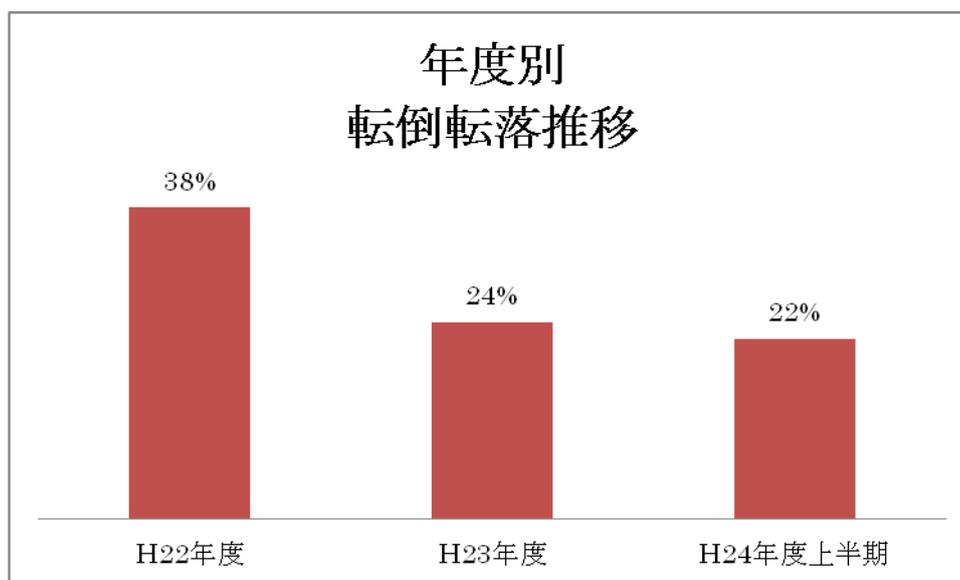
—近年の転倒・転落事例の発生件数はどのように推移していますか？またその原因はどのようにお考えですか？

直近3年間の転倒・転落事例の発生状況は、平成22年度には全体の38%を転倒・転落が占めていましたが、平成23年度は24%、平成24年度は上半期終了の時点で22%となっており、減少傾向です。

また、昨年からは看護部の医療安全管理者で構成するセーフティー委員会の中で「転倒・転落対策チーム」を作って、入院時のアセスメント対策シートに沿ってカンファレンスを行い、対策を検討・実施する事を徹底しています。

これまでは、アセスメントシートのみを対策の根拠としてきましたので、シートでは見えないリスクを持っている患者様に対してもある程度対策が出来るようになった事で、減少したのではないかと考えます。

【直近3年間の院内インシデントに占める転倒・転落事例の割合】



—転倒・転落事故防止のためにどのような人的対策をとっていらっしゃいますか？

当院では、7:1の看護体制をとっていますが、各勤務帯の始業時及び就業時に環境整備の実施および、所属長（病棟師長）の病室巡回を朝・夕の1日2回実施しています。

各勤務帯では、受持看護師またはチームリーダーによる転倒・転落のリスクがある患者様の把握を病床マップに表記して可視化する事により、全スタッフへの注意喚起を行っています。

高リスクの患者様に対しては、スタッフステーション隣接の観察室での見守りや家族の協力を得ています。

やむを得ない場合は、最終手段としてマニュアルに沿って身体抑制を実施します。

3. 離床センサーについて

—離床センサー導入の目的と効果をお聞かせ下さい。

「患者様の危険行動の早期把握」を目的として、離床センサーを導入しています。

現在、計 5 台の離床センサー、赤外線コールを運用しており、転倒・転落、徘徊、離院の防止に役立っています。特に夜間はスタッフの数が少ないので、離床センサーを使用する事により、行動の早期発見が出来る効果的な使用ができています。

—赤外線コールは、どのような対象者に使用されていますか？

赤外線コールは、転倒・転落リスクが高い患者様に対し、ベッド上での起き上がりを検知する使い方が多いです。ただし、設置のミスなどによって報知が遅れたりする事もあります。正しい使用方法をスタッフに周知する必要があると感じています。

—離床センサーの管理、運用上の工夫があればお聞かせ下さい。

院内の離床センサーは、現在は医療安全管理室で管理しています。

貸し出しの際は、ノートに病棟名、対象の患者様名、日付、スタッフの名前を記入してもらっています。

患者様の転室があった場合、以前は転室先にセンサーも移設していましたが、どこに誰に使用しているか把握できなくなるので、現在は一旦返却し、ノートに記入してもらい再度貸し出しを行っています。

また、スタッフステーション内のホワイトボードにはどの患者様に離床センサーを使用しているか、ひと目で分かるように情報を掲示しているので、離床センサーが鳴った時に迅速な対応が出来ます。

4. メーカーへの要望について

今回、テクノスジャパンの『医療安全応援キャンペーン』に参加し、『離床センサーワークショップ』を開催してもらった事で、離床センサーには様々な機種があり、機種選定が効果に大きく影響する事が分かりました。

こういったキャンペーンは、ぜひ今後も企画して欲しいです。

*『医療安全応援キャンペーン』は、今年 5～6 月の 2 ヶ月間に『転倒・転落対策セミナー』または『離床センサーワークショップ』と『テクノス通信』のお申込みをいただき、無料の出張セミナーと情報配信により医療安全にお役立ていただく企画で、全国で約 300 の病院様にご参加いただきました。

5. 最後に、何か一言お願いいたします！

当院は、一宮市および尾張西部の地域に根ざし、“街と人が明るく健康でいられますように”という理念の元に医療と看護を提供しています。

また、医療事故を 1 件でも減らし、私たち看護者が心を痛める身体抑制もできる限りなくせる病院を目指したいと思っています。